別表５
⑶

主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	夏　天

主 論 文 題 名：

親の長期不在と子どものライフコースの格差に関する研究
――中国における「留守児童」経験者の分析から――

（内容の要旨）

【問題の所在と本研究の構成】

本研究は、親の不在が子どもの教育達成に対する不利の形成メカニズムを検討するために、親不在世帯の一形態である中国の「留守児童」世帯に着目し、「留守児童」経験が教育達成に及ぼす不利な効果、およびその不利が、主たる養育者の子どもへのかかわりの減少によってどの程度説明されるのかを、中国の大規模パネルデータを用いて計量分析によって検討するものである。

子どもの教育機会は出身家庭の経済的な状態や文化資本の影響を強く受ける。離婚率が上昇し、家族形態の多様化が進んでいる現在、家族行動の階層化とその結果としての子どもの教育達成の不平等を明らかにすることは、家族社会学の重要な研究課題である。また近年では、親の子どもへのかかわり（Parenting）の階層化が、教育達成の格差の有力な要因として注目されている（Lareau 2011）。したがって、親不在の世帯（離別、非婚、親の長期不在など）の子ども期の格差形成メカニズムを明らかにするためには、子どもへのかかわりの視点が重要である。

従来の研究は、親の不在を経験した子どもの教育達成上の不利、および経済的な要因による部分的な媒介効果を明らかにしてきたが（稲葉 2011；余田 2014）、子どもへのかかわりの効果については検討が十分ではない。また、母子世帯の場合には、親の離婚によって世帯所得が減少し、貧困低所得状態に陥りやすいという特徴を持つため、経済的な要因以外の効果を十分に検証することが難しい。本研究は、子どもへのかかわりの効果を検証するために、中国の「留守児童」世帯に注目した。「留守児童」とは、両親と家計を共にしつつ、親の就労を目的とした移動によって、長期的に別居している子どもを指す。こうした「留守児童」世帯を対象とすることによって、強い経済的な不利の効果に隠されたペアレンティングの効果を検証することができると考えたためである。

以上の研究目的にしたがって、ペアレンティング仮説に関する先行研究を理論的に整理したうえで、計量分析によって、（1）親の不在による子どもへのかかわりの減少、（2）親の不在と子どもの大学進学希望の関連およびペアレンティング仮説の検証、（3）親不在の経験が普通科高校進学に対して有する因果効果をそれぞれ検証した。結論部では、それらの分析で得られた知見について整理し、学術的・実践的インプリケーションおよび今後の課題を示した。

主　論　文　要　旨

【使用するデータについて】

北京大学社会科学調査センターによるパネル調査「China Family Panel Studies」(CFPS)の、第 1 回～第 6 回(2010～2020 年)調査の個票データを用いた。CFPS は、2010 年から 2 年置きに調査が実施されているパネル調査であり、ランダムサンプリングによって標本抽出が行われている。ベースラインである 2010 年調査の有効サンプル数は 42,590（0～15 歳人口に該当する子ども票が 8,900）であり、2020 年の追跡調査の有効サンプル数は 28,529（子ども票が 6,985）である。CFPS は親不在状況の変化や子どもの主たる養育者の変化、主たる養育者の子どもへのかかわり、および子どもの高校進学状況までを広く把握できる貴重なデータである。CFPS データの使用にあたっては北京大学社会科学調査センター（ISSS）に二次利用申請を行っており、使用許可を得た。

The data are from China Family Panel Studies (CFPS), funded by Peking University and the National Natural Science Foundation of China. The CFPS is maintained by the Institute of Social Science Survey of Peking University.

【主な分析結果】

① **親の不在による子どもへのかかわりの減少**：第 3 章「親の不在状況からみるペアレンティングの変化」では、CFPS の 2012 年から 2020 年までのパネルデータを用い、親の不在による主養育者の続柄の変化、および子どもの性別による差異に着目しながら、親の不在によるペアレンティングの頻度の変化について検討した。固定効果モデルを用いた分析の結果、「父のみ不在」以外の親の不在、とくに両親ともに不在の場合には、子どもへの情緒的なかかわり、実践的なかかわり、モニタリングの頻度が減少することが明らかになった。また、このような親の不在によって生じるペアレンティングの減少の一部は、主養育者の続柄の変化、とりわけ母親から祖父母への変化によって説明できた。さらに、子どもの性別によってその効果が異なるのかどうかを分析したところ、男子のほうが親の不在によってペアレンティングが減少するという傾向が示された。

② **親の不在と子どもの大学進学希望**：第 4 章「親の不在状況と子どもの大学進学希望の関連についての男女間比較」では、CFPS2010 年データを用いて、「外出労働」による親の不在が子どもの大学進学希望と関連するのか、また、その関連がペアレンティング仮説によってどれくらい説明されるのかを検討した。男女別に多変量解析を行った結果、男子においてのみ「両親不在」の場合に大学進学希望が低いことが示された。すなわち、両親を代替する祖父母による養育は、両親による養育と等価なものとはなりえないと考えられる。しかしながら、子どもへの教育的なかかわりが親の不在と子どもの大学進学希望を媒介する効果は限定的であり、「両親不在」の効果の約 1 割が子どもへの教育的なかかわりの頻度によって媒介さ

主　論　文　要　旨

れるに過ぎなかった。本研究は、使用するデータの制約ゆえにペアレンティング仮説の検討が十分ではないという課題が残されている。ペアレンティングには、検討してきた子どもへのかかわりの頻度以外に、子どもの交友関係の把握・統制などの質的な側面も含まれる。今後、他のデータを用いてそれらの側面からペアレンティングの効果を検討する必要がある。

③ **親の不在経験と普通科高校進学**：「留守児童」経験には階層的な異質性が交絡しており、出身地域や親の学歴などの属性の偏り（セレクションバイアス）が存在する。したがって、「留守児童」経験の効果を検証するためには出身階層のセレクション効果を十分に統制する必要がある。そこで第 5 章「親の不在経験と普通科高校進学」では、「留守児童」経験の効果が過大に検出されることを防ぐために、傾向スコア・マッチング法（Propensity Score Matching）を適用した。CFPS 2010 年（wave 1）、2012 年（wave 2）、2018 年（wave 5）のデータを使用し、子ども期の「留守児童」経験が普通科高校進学に対して有する因果効果について検討した。普通科高校進学に注目した理由は、中国において普通科高校進学がライフコースの初期段階における重要なライフチャンスの一つであるからである（侯 2020；唐 2015）。分析の結果、子ども期の「留守児童」経験が高校進学に及ぼす不利な効果は、上位トラックである普通科高校進学のみに確認できた。子ども期の「留守児童」経験はライフコースにわたって長期的な不利を生み出す可能性がある。

【結論】

本研究全体を通じて、中国における子どもの「分岐する運命」（McLanahan 2004）は「留守児童」と非「留守児童」の間に生じていることが明らかになった。離婚や婚外出生などによって生じる親の不在だけでなく、経済的な不利が生じにくい「留守児童」経験においても、親の不在が子どもの教育達成に不利な効果を有していることが明らかされた。このことは、経済的な要因のみでは、親の不在が子どもの教育達成に及ぼす不利な効果を説明することができないことを意味している。

また、親の不在と子どもの不平等に関する従来の研究は、子どもの性別によってその効果に違いがあるのかどうかを十分に検討してこなかった。本研究は、親の不在は子どもへのペアレンティングの不足を招くが、とくに男子においてその傾向が大きいことが明らかにされた。親の不在は男子により不利をもたらすという仮説命題は、「留守児童」世帯だけでなく、離婚や婚外出生などに起因するその他の親不在の世帯についてもあてはまるように思われる。

今後の課題としてまず、他のデータを用いて質的・量的の両側面からペアレンティングの効果を検討する必要がある。また、CFPS は現在も継続している社会調査プロジェクトのため、今後データが整い次第、「留守児童」経験が大学進学への効果の検討を進めていきたい。